



2月になると、ところどころの木の葉が枯れて
クス集めのリヤカーをひいている、
ぼるをまとった少年だとか
山から降りてきたけれども、職のない先住民だとか
その前を疾走する、すし詰めの中輪バイクのあいだを
カサカサと音をたてながら、舞っていく
太陽に肌は焼け、風は暑い
ブーゲンビリアのピンク、ハイビスカスの赤
陽光を受けて空いっぱい枝を広げた大木の
幹に結ばれた肥料袋
その上に血のように赤いペンキで書かれた文字
「イラクへの戦争に加担するな！キリスト教学生連盟」
よそごとではない、
イスラム教徒もいる、キリスト教徒もいる
反政府ゲリラも活動している
先日も爆破事件があり、小一時間の彼方では
戦闘を怖れて避難した5万人の民がとほうに暮れる
アメリカが好戦的な態度をとればとるほど
この種の事件は頻発する
その横で、子どもたちをたくさんせた観覧車と
傷だらけのメリーゴーランドが回る回る
町はフィエスタでお祭り気分だ
子どもたちの目は曇らない
でもミンダナオにも、
枯れた葉の散る冬がある（友）

『ミンダナオ子ども文庫』活動報告
先住民の村ルモット

松居友

ぼくはこの村が好きだ。

ここは、アポ山のふもとに住む先住民の村ルモット。二度目の訪問。

前回は山のふもとの村に車を置いて、若い男性のスタッフと手分けして、八〇リットルの大型リュック三つに、上ぶたまでぎっしりと絵本をつめて、ふうふう言いながら山道を歩いた。



遠くから見ると、ジャングルしか見えない山並みでも、所々に椰子の葉葺きの家があって、エッこんな所にもという場所に人が住んでいる。たいがい家の周囲に小さな焼き畑を開き、自給自足に近い形で生活しているバゴボ族の家族。

午後二時、読み聞かせの時間になると、山上の掘っ建て小屋にしか見えないデイケアセンターに子どもたち



ちが集まってくる。いつたこの山のどこに、こんなに沢山の子ども

たちがいたの？

思わず驚きの叫びをあげてしまうほど沢山の子どもたちが、お

話に期待して大きな瞳を輝かせながら、小屋の外まであふれている。下界の子どもたちよりも、いくぶん色黒の先住民の子どもたち。貧しいけれども目がとてもきれい。



母ちゃんたちを中心に、大人たちも集まってくる。高校生や若者たちも集まってくる。

読み聞かせが終わった後、若いスタッフたちは、ルモットの子どもたちとジャングルの奥の滝に行き、生きた鶏を料理して夕食を食べた。その晩ぼくらは、星の下で眠った。



PLEASE HELP ME!

この子・助けてくれませんか！



「松居さん、医療ミッションまで始めるつもりですか？」と聞かれてしまった。

もちろん、ミッションを始めるつもりは毛頭ないけれども、読み聞かせに難民キャンプや貧しい村に行くと、兔口の子や瘤のある子にときどき出会う。知らん顔して通り過ぎるのは、簡単なだけけれども、こうした子供が生涯背負っていく重荷を考えると、思わず立ち止まってしまう。

とりわけスタッフの中に17年間も兔口で苦しんだ少女がいて、家族からも見離され、何度も死のうと思ったその壮絶な孤独と悲しみの告白を聞いているだけに・・・けっきょく放っておけなくて、いろいろ調べた。ポケットマネーをはたいて安くない検査費や治療費も出した。神父さんやシスター方から「そんなことをやっても切りがないよ」とも言われたけれども、試行錯誤をくり返しながらか、ミッション会に連絡を取って信頼できるルートも開いた。そしてわかってきたことは、NGOに連絡すれば手術代はただ、薬代だけで治療が受けられるということ。

兔口の場合は病院で2500ペソ(6000円)けれども、貧しい家族にとって、一ヶ月分の生活費にも匹敵するし、まして難民家族にとっては不可能な出費だ。しかも、奇妙なことだが、手術代を出すNGOやミッション会があっても、薬代を出す団体があまりないので、貧しい人たちは結局治療が受けられない。



写真の兔口の子は、今回の戦闘で難民となった5万人を越すイスラム教徒の子どもたち。ここ数年で三度も難民になって放浪する、彼らの顔は絶望的に暗い。笑わないし、泣きはらした顔がそのまま固まってしまったような表情で、ビニールシートの下で過ごしている。病気で死んでいく子も多い。教会やNGOが物資中心の救済活動をしているけれども、アメリカ軍がミンダナオにくる中で、無力感だけがつのっていく。

このような中で、イスラムの若者も交えた読み聞かせは、地元を腰をすえていないと出来ないきめ細かな活動だし、大きな団体は、そんなささいなことよりまずは海外やマニラからの食料援助だ薬品だと言うけれど、結局待てど暮らせどやってこないし、物資の援助がすべてじゃない！

私たちは大きな団体がやれない事を、やっていこうと決心した。子供たちへの心のケアという意味でも読み聞かせは効果が多いし、目の前にいる子で救える子は、ひとりでもふたりでも良いから救っていこう。兔口の子供の救済も悲しい難民キャンプにとっては、ちょっとした明るいニュースで、こんな所から固まった心が解きほぐされて、生きる希望が出てくるように思える。

写真の瘤のある子サニージェイ(1)は、目に近い場所の手術なので、使用する薬代が30,000ペソ(75000円)(私立病院では10倍)ほどかかるのですが、まずは救える子供たちがいたら、誌上で皆さんにお願いしようと思ひました。決意しました。

「アジア子ども文庫」の寄付振り込み用紙の通信欄に「ウサギの子」と記してくだされば、簡単な顔の手術を中心にした、子供のための医療費枠にしたいと思います。





私の生活、私の家族

家族と幸せだったころ

七人の妹と一人の弟が、私にはいます。父は亡くなりましたが、でも母は元気で今も山の村で生活しています。妹のうち二人は結婚しています。

私はとても貧しい家に育ちました。けれども、貧乏にもかかわらず、姉妹全員と弟それに父と母がいるとき、一家団欒はとても楽しく幸せなものでした。家では、みないっしょに働き、いっしょに食事をしました。そして、食後は母と父がとって

ジクジクは、山の生まれ。お母さんは産婆さん。おじいさんは、マナンバルと呼ばれる、土着のお医者さん。薬草のことなら、何でも知っている。おじいさんは、手を見てその人の人生を見事にあてる。姉さんは町の教会のオルガンを弾き、とにかく驚くほど感性豊かで献身的な家族。

姉妹たちはみな、目の光が印象的で、山の家を訪れると、ぼくは妖精かこびとたちに囲まれたようなふしぎな気持ちになる。しかし、この山でもかつて、政府軍と反政府軍が戦って、多くの犠牲者を出したのだ。彼女の夢は、働いて妹たちを大学まで行かせてあげること。

もおもしろいお話をしてくれました。子どもたちは、耳をそばだててお話に聞き入ったものです。小さかったころのことを思い出すと、家族でとても楽しかったたくさんの思い出がよみがえってきます。

日曜日になると、家族そろって教会に行きました。教会では、信者としての勤めの一部を果たすことが出来て幸せでした。というのも、私たち家族は神さまから音楽の才能をいただいていたのです。教会で父はギターを弾き、母と私たち子どもは合

唱して、讃美と感謝の歌をうたって神さまにご恩返しをしたのです。

村で歌唱コンテストが開かれるときは、必ず参加しました。そのために一生懸命練習したので歌唱力ものびたと思います。コンテストで受賞すると、家族がみんなが大喜びで、歌のじょうずな娘を授かったことをとても誇りに思ってくれました。

学業の方は、小学校卒業まで毎年、名誉ある生徒にあたえられるリボンをもらいました。長女から末娘にいたるまで、みなりボンをもらいましたから、父も母も、わが



山の家



子が学校で活躍するを見てとても幸せそうでした。しかし結局のところ貧しかったので、九人の兄弟姉妹のなかで大学教育まで受けられたのは、姉と私だけ、あとのみんなは小学校で学業を終えざるをえませんでした。

それでも母は、少なくとも姉と私が大学まで行けたことを喜んでいました。学業以上に、私が将来、妹たちや家族、そしてまた支援を必要としている貧しい子どもたちのために生きていきたいと思っています。を、とてもうれしく思ってくれています。私たちは貧しい家族ですけれど、それでも少しでも人々の役に立てることができれば幸せです。他の人々を助けること、とりわけ子ども



180, 1... 1/2, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8, 9, 10, 11, 12, 13, 14, 15, 16, 17, 18, 19, 20, 21, 22, 23, 24, 25, 26, 27, 28, 29, 30, 31, 32, 33, 34, 35, 36, 37, 38, 39, 40, 41, 42, 43, 44, 45, 46, 47, 48, 49, 50, 51, 52, 53, 54, 55, 56, 57, 58, 59, 60, 61, 62, 63, 64, 65, 66, 67, 68, 69, 70, 71, 72, 73, 74, 75, 76, 77, 78, 79, 80, 81, 82, 83, 84, 85, 86, 87, 88, 89, 90, 91, 92, 93, 94, 95, 96, 97, 98, 99, 100

も幸せなことだと思えます。

私は現在十八歳ですが、未来を切り開くために今までも出来るだけの努力をしてきました。一生懸命勉強してきましたし、神さまのことも忘れずに生きてきました。さらに将来、家族を助けたいと思っている計画を実行すれば、みんなも喜んでくれることでしょう。

高校時代には、とてもつらい体験や困難な時があったのですが、今こうして大学に入れてとっても幸せです。未来を切り開こうとする気持さえあれば、貧乏は成功の妨げではない」という言葉を、私は確信を持って言うことができます。知恵は、心のなかにいったん入れば、だれも奪うことができせんから。

つらかった思いで

今家族が住んでいる地に来る前に、私たちは五年間べつの場所に住んでいました。

六歳になったときに、私は自分の家族がとても貧しいのに気がつきました。日々の食べものすらない日があればあったからです。そんなある日、家庭内のいざこざが原因で両親はけんかをし、それが原因で母と三人の姉妹と私は家を離れ、ほぼ四年間のあいだ別居して過ごすことになりました。このことは、小さな子どもであった私たちには、とてもつらい出来事でした。なぜなら、私たちは父親にかまってもらいたかったし、家族と一緒にすごすことがなにより大事だったから。

さらに私が七歳になったときのこと、とても忘れられることの出来ない出

来事がありました。それは、政府軍と新人民軍（共産党系の反政府軍、NPAと呼ばれ現在でも山岳地帯で反政府闘争を続けている）とのあいだの戦闘が起こったのです。最初はちかくの山頂で撃ち合いがはじまり、やがて私たちの村のそばでも起こりました。住民たちは、他村へ避難して、一週間のあいだ学校の教室で難民生活をしました。たくさん政府軍の兵隊と反政府軍兵士が死にました。

家の近く撃ち合いがあったのは、ちょうど朝の八時ごろのことでした。とつぜん「バン！」というビツクリするほど大きな音がして、銃弾が家を貫いたのです。びつくりした私たちは、恐怖で青ざめながら家から飛び出し、地面に伏せました。その後銃撃は続き、昼になっても止みません。お腹がすいても、射撃音が怖くて、昼食どころではありません。命からがら他の場所に避難できたのは、ようやく二時をまわってからのことでした。道々、私は真っ黒にすすけた大きなナベを持って、泣きながら歩いていました。銃撃が怖くて、怖くて。

戦闘がようやく終わって家に帰ってみると、いろいろな物がすっかり破壊され、鶏も数羽いなくなっていました。それでも、とにかくみなが無事だったことがうれしかった。

もう一つ人生でつらかったのは、高校時代に学業を経済的に援助してくれていた老人から、過剰な好意を寄せられたことでした。その老人は、すでに八五歳で、私は祖父のよくな思いで接していたので、それ以上の気持が持てずにとても困りました。いろいろな物をくれるのです



が、どうしても受け取る気持になれません。とりわけ、お金を受け取らないようにしました。その老人は、私を遠いところに連れ去って、あわよくば結婚生活を送ろうと思っていたように思っていました。私をいつも監視し

て、お昼時にクラスメートを連れて行くとはひどく嫉妬して責めるのです。私以外はだれも家に入れようとしません。私はその家ですっかり落ち込んでしまいました。

私の夢と将来の計画

私の夢は、自分の家族とそれから援助を必要としている子どもたちのために人生を捧げることです。勉強を終えたら、良い仕事を見つけて、まずは妹たちの学業を支援したいと思っています。いつかたくさん子どもともたちが通えるような、子どもと大人のための図書館を村に建てるのも夢です。



他の土地をたずね、異なった宗教、異なった生活や文化を持った人々とも会いたい。外国にも行って、異なった伝統や文化や言語を学んでみたいし、結婚するのだったら、未来の夫は外国人がいいかな。

理想のライフスタイルは、愛し合い、尊敬しあい、心がひとつで、全員のなかに平和と献身の気持のある家族。問題が起こったら、みんなで助け合って解決し、どうすれば一番良いかをいっしょに考えられる家族。そして、家族が幸せであれば、自分たちだけのことではなく、次の世代、とりわけ子どもたちのより良い未来のために何かすることが出来るでしょう。そして、家族を持つとしたならば、私はこのキダパン市に住みたいと思っています。





スタッフ紹介・今回この人

ノノイクんの事 松居友

彼に出会ったのは山だった。中腹の森の中に、なかば崩れかけている一軒家があって、その貧しい家に彼はいた。

ポリオで生まれたものだから足が小さく萎えていて、26歳になるまで一步も家から出たことはなかった。車いすを使えば生活はできるのだけれども、貧しい山の家では無理だし、買うお金があるはずもなかった。

学校へ行くのもあきらめた。しかし、頑張りやで勉強好きだったから、弟や妹たちから英語とタガログ語を学んだ。不自由な体だけれど、いつか世界を見てみたい。自分で仕事もしてみたいというのが、長年の大きな夢だった。

不自由な手を駆使しながら、ギターを独学で学んでいった。絵を描くことも好きだった。

彼の家族は、日々の食事すらままならないのだけれど、とても明るく思いやり深い。

ぼくが初めておじゃましたとき、ノノイクんはギターを弾き、父さんも母さんも兄弟や親戚たちも、みんなで夜更けまで歌った。とてもなつかしい夜だった。うまく言えないけれども、貧しい人たちといっしょに床にすわって、葉を浮かべただけのスープとトウモロコシの粉で食事をしたり歌ったりしていると、ふっと、とてもなつかしい気持ちになることがある。ガラスビンに石油を入れて、丸めた新聞紙を芯にした火が、灯りとなってゆらゆら揺れて、外の間には蛍が飛び、豊かな世界から来たぼくが言うのは不謹慎なのかも知れないけれども、それでも人肌のぬくもりに久しぶりに出会ったような、なつかしい気持ちになるのだった。

キダパワン市に、今度子ども図書館を作ろうと思っている。ささやかな図書館だけれども、ミンダナオでは初めての子ども図書館になるだろう。すでにはじめている貧しい地域での読み聞かせや、家庭文庫を建設するための拠点になるところだ。あきらめずに努力すれば、いつかはかなうと信じている。

ぼくの夢は、フィリピンの貧しい若者たちに、未来の夢やちょっとした仕事を伝えることで、図書館活動や読み聞かせ、出版活動を通して育った子どもや若者たちが、それぞれの未来に向かって羽ばたいていってくれたら良いなと思っている。

ぼくは、ノノイクんをスタッフに入れることに決めた。今はお願いしたダバオの医療ミッション会で、3ヶ月のトレーニングをつんでいることだろう。

山から下りる日、皆泣いた。とりわけ末の妹が泣いた。家から出るのも、町も、仕事も、彼にとっては初めての驚くべき経験なのだけれども、彼は喜びに燃えて山を下りた。



ミンダナオの子どもたち



アンジェリカ

写真・松居友

アジア子ども文庫は、アジアの貧しい地域に文庫活動を展開しています。
活動に賛同してくださる方は住所氏名を明記されて郵便振り込みで寄付をおよせください。

郵便振替口座番号 00110 8 52331

加入者名 『アジア子ども文庫』

年三回『ミンダナオの風』をお送りいたします。

子供の医療活動に寄付をくださるかたは、振り込み用紙の通信欄に「ウサギの子」と記してください。

メールアドレス Lfacj imukyoku@aol .co m

フィリピン、ミンダナオは郵便事情が悪いため、連絡はメールでお願いします。

発行「ミンダナオ子ども文庫」 編集 松居友

『ミンダナオ子ども文庫』では、日本の絵本の寄贈もお願いしています。眠っている絵本がありましたら、熊谷カトリック教会（〒360-0031 熊谷市末広2 - 115 0485-21-1098）にお送りください。そこから、『ミンダナオ子ども文庫』に発送され、翻訳作業が進められた後、読み聞かせ本として収容されます。また翻訳ボランティアもお願いしています。英語、タガログ語、ピサヤ語の翻訳をお願いできる方はお知らせください。

「ミンダナオ子ども文庫」は、アジア子ども文庫の支援のもとに活動しています。カトリック教会キダパワン教区が主催する孤児施設「イースタービレッジ」と、活動において協力関係にあります。別組織です。